

## 話者の対象認識過程からみた助詞「が」「は」の意味分析

1B-8

宮崎正弘 高橋大和

新潟大学・大学院工学研究科

## 1. まえがき

日本語の格助詞「が」、副助詞・係助詞「は」の意味解釈については、多くの国語学者・言語学者により論じられており、既に種々の学説が提案されている。たとえば、久野は図1に示すように、「は」を主題と対照に、「が」を中立叙述と総記と目的格に分け、新情報/旧情報という観点から「が」と「は」の相違を論じている。<sup>1)</sup>しかし、従来の学説の主な論点は主題/主格、新情報/旧情報などといった点にとどまっておき、話者の対象認識過程まで踏み込んだ議論はあまりされていない。池田は、認知的な観点から、「は」が「その発話の対象世界が何であるかを指し示すものである」のに対して、「が」は「対象世界について叙述する際の着目対象を指すもの」という説明原理を与え、「が」に関する種々の言語現象をこの説明原理に基づいて説明することを試みている。<sup>2)</sup>

時枝の言語過程説<sup>3)-4)</sup>を発展的に継承した三浦の助詞論<sup>5)-7)</sup>によれば、助詞は用言に対する実体の関係(格関係など)を示すだけでなく、実体に対する話者の捉え方をも表す。本稿では、このような観点から、格助詞「が」、および副助詞・係助詞「は」を対象に話者の対象認識過程からみた意味分析を行い、核となる概念(コア概念)を明らかにする。さらに、「は」や「が」を使い分けることによって生じる微妙なニュアンスの相違をも解析できるようなより高度な日本語文の意味処理を実現するための助詞「は」「が」に関するルール化を試みる。

## 2. 三浦文法による助詞の扱い

言語表現には万人に共通する対象のあり方がそのまま表現されているわけではなく、対象のあり方が話者の認識(対象の見方、捉え方、話者の感情・意志・判断など対象に立ち向かう話者の心的状況)を通して表現されている。すなわち、言語は対象-認識-表現の過程の構造をもつ。ここで、意味とは「音声や文字の種類に結び付き固定された対象と認識との間の関係」であり、言語表現そのものに客観的に存在する。語は表

- 主題(総称): 鯨は哺乳類です。
- 主題(文脈指示): 太郎は学生です。
- 対照: 雨は降っていますが雪は降っていません。
- 中立叙述: 雨が降っています。
- 総記: 太郎が学生です。
- 目的格: 僕は花子が好きだ。

図1. 助詞「は」「が」の用法(久野<sup>1)</sup>)

現されて始めて意味(関係)を生じるのであり、対象や認識は意味を構成する実体である。

言語表現は、話者が対象を概念化して捉えた客体的表現(詞)と話者の主観的な感情・要求・意志・判断などを直接的に表現した主体的表現(辞)に分けられる。日本語文は詞が辞を伴って入れ子を構成していく、入れ子構造モデルとして捉えられる。

助詞は辞であり、対象(実体)に立ち向かう話者の立場を直接表現する。助詞のうち、実体のあり方の認識を表すのが格助詞、認識に対する陳述の要求を表すのが係助詞、実体や認識に対する観念的前提の付加を表すのが副助詞である。格助詞「が」は実体の個性、係助詞「は」は実体の普遍性、副助詞「は」は実体の特殊性を表す。

## 3. 助詞「が」「は」のコア概念

一般に対象は複雑な構造と多様な属性を持ち、その数は数えきれない。このような性質を持つ対象を有限な能力で認識するには、種々の捨象が行われる。すべての対象はそれ自身を他と区別する特徴を持つと同時に何らかの共通性を持つ。この個性と普遍性は相対的なものであり、認識者の視点によって相互に入れ替わる。ここで、対象の個性に着目すれば対象は具体的に取り上げられ、普遍性に着目すれば対象の個別的側面は捨象されて抽象化が行われる。

## 3.1 助詞「が」のコア概念

格助詞「が」は、対象(実体)の個別的側面に着目して、その時その時の実体のあり方を個別的・具体的に取り上げることを表す。たとえば、「鳥が飛ぶ」においては、認識者の目前にいる「鳥」という種(クラス)に属する個体(インスタンス)としての「鳥」を取り上げている。久野の中立叙述は、この用法にあたる。また、クラスとしての「鳥」も、より抽象化された上位概念であるクラスとしての「動物」から見れば、個別的・具体的に取り上げたことになる。特殊な文脈において、今話題にのぼっている動物の中で、「鳥だけ(こそ)飛ぶ」という意味で、「鳥が飛ぶ」と表現する場合にも、実体の個性を表す格助詞「が」が使われる。この場合は個性が特に強調され、実体の限定性・排他性を表すようになる。久野の総記や目的格は、このような用法にあたる。格助詞「が」は、従来、新情報や主格を表すと言われている。しかし、新情報は、性質上個別に取り上げる必要があるから、また主格は用言に必須のものとしてやはり個別に取り上げる必要があるから、それぞれ「が」が使われると考える

べきである。また、「が」は主格以外にも使われることは、久野が「が」の用法として目的格をあげていることから明かであろう。さらに、池田の「対象世界の中で着目するもの」は、当然個別に取り上げる必要があるため、「が」が使われると考えられる。

### 3. 2 助詞「は」のコア概念

係助詞「は」は、対象の普遍的側面に着目して、いつも変わらない実体のあり方を普遍的・抽象的に取り上げることを表す。たとえば、「鳥は飛ぶ」においては、インスタンスとしての「鳥」ではなく、クラスとしての「鳥」を取り上げている。久野の主題（総称）は、このような用法にあたる。

副助詞「は」は、対象を他の実体と比較してその特別なあり方、すなわち実体の特殊性を取り上げることを表す。通常、ある観念的前提が存在する。たとえば、「昨日は遅刻した」においては、「いつもは遅刻しない」という観念的前提が存在しており、「遅刻する」という観点から見た「今日、一昨日、…」と比較した「昨日」の特殊性を取り上げている。また、特殊な文脈において、今話題にのぼっている動物の中で、「他のものと異なり鳥こそ飛ぶ」という意味で、「鳥は飛ぶ」と表現する場合にも、実体の特殊性を表す副助詞「は」が使われる。この場合、実体の限定性・排他性を表す「鳥が飛ぶ」と類似な表現であるが、「が」を用いた場合に比べて、排他性はあまりない。久野の主題（文脈指示）は上記のような用法にあたる。さらに、「雨は降っているが雪は降っていない」では、「雨」のときは「雪などそれ以外の天候」ではなく、「雪」のときは「雨などそれ以外の天候」でないことを意識して、相互前提において両者（「雨」と「雪」）の特殊性を取り上げている。この相互前提から対照の意味が生じる。久野の対照は、このような用法にあたる。

副助詞・係助詞「は」は、従来、旧情報や主題を表すと言われている。しかし、実体の普遍的側面（たとえば、クラスとしての「鳥」の概念）は、誰でもが共通の知識として持っている既知の情報、すなわち旧情報である。また、実体の特殊的側面は、話者と聞き手の間で対象の比較対象となる実体や観念的前提とともに知識を共有して始めて理解できる旧情報である。このような旧情報を「は」で取り上げ、それらについて叙述する、すなわち新情報を付加することにより主題の意味を生じるのである。さらに、池田の「対象世界が何であるか指し示すもの」は、「は」が主題を示すことを別な表現で述べたものと言えよう。

### 4. 助詞「が」「は」の意味解析ルール

3で述べたように、助詞「が」は実体の個別性や限定性を表し、助詞「は」は実体の普遍性や特殊性を表す。日本語の意味解析においては、このような多義を解消し、助詞の意味を確定する必要がある。ここでは、助詞「が」や「は」に前接する名詞Nをクラス/インスタンスの観点から以下のように分類することにより、助詞「が」「は」の意味解析ルールを作成した。

- ・N<sub>1</sub> : クラスとインスタンスを表すもの（例：鳥）
- ・N<sub>2</sub> : インスタンスを表すもの（例：太郎、私）
- ・N<sub>3</sub> : クラスをあらわすもの（例：鳥類）

= 助詞「が」「は」の意味解析ルール =

[N<sub>1</sub>+が] 文脈よりN<sub>1</sub>→N<sub>2</sub>の場合、限定性。

目的格の場合、N<sub>1</sub>→N<sub>2</sub>とし限定性。

例：酒が好きだ。／水が飲みたい。

総記の場合、N<sub>1</sub>→N<sub>2</sub>とし限定性

例：燕が鳥だ。／子供がかかりやすい。

上記以外の場合、N<sub>1</sub>→N<sub>2</sub>とし個別性。

例：鳥が飛ぶ。／雪が白い／犬がいる。

[N<sub>1</sub>+は] 文脈よりN<sub>1</sub>→N<sub>2</sub>の場合、特殊性。

存在文の場合、特殊性。

例：犬はいる。／本はある。

対照の場合、特殊性。

例：月は東に日は西に。

目的格の場合、N<sub>1</sub>→N<sub>2</sub>とし特殊性。

例：酒は好きだ。／水は飲みたい。

上記以外の場合、N<sub>1</sub>→N<sub>2</sub>とし普遍性。

例：鳥は飛ぶ。／雪は白い。／燕は鳥だ。

[N<sub>2</sub>+が] 限定性（N<sub>2</sub>で個別性が重複→排他性）。

例：太郎が学生です。／私が行く。

[N<sub>2</sub>+は] 特殊性（N<sub>2</sub>で個別性は明か→中立的表現）。

例：太郎は学生です。／私は行く。

[N<sub>3</sub>+が] 限定性。

例：鳥類が爬虫類から進化した。

[N<sub>3</sub>+は] 普遍性。

例：鳥類は爬虫類から進化した。

### 5. あとがき

三浦の助詞論を基に、話者の対象認識過程からみた助詞「が」「は」の意味分析を行い、コア概念を明らかにした。さらに、実体のクラス/インスタンス性などに着目した助詞「が」「は」の意味解析ルールを作成した。今後、多くの例文による本ルールの検証、改良を進めるとともに、本ルールを組み込んだ意味解析システムを試作していく予定である。また、日本語文生成への適用についても検討する予定である。最後に、御討論頂いたNTT通研の池原・白井両氏に深謝する。

[参考文献]

- 1) 久野：日本文法研究，大修館書店（1973）。
- 2) 池田：助詞「が」の働きについて－認知的なレベルからの考察－，信学論，Vol. J-72-D-II, No. 11, pp. 1904-1909（1989）。
- 3) 時枝：国語学言論，岩波書店（1941）。
- 4) 時枝：日本文法口語篇，岩波書店（1950）。
- 5) 三浦：認識と言語の理論，第一部～第三部，勁草書房（1967/1967/1972）。
- 6) 三浦：日本語の文法，勁草書房（1975）。
- 7) 三浦：日本語とはどういう言語か，講談社（1976）。
- 8) 宮崎，池原，白井：言語の過程的構造と自然言語処理，自然言語処理の新しい応用シンポジウム論文集，ソフトウェア科学会/信学会，pp. 60-69（1992）。
- 9) 宮崎，高橋：三浦文法に基づく日本語形態素処理用文法の構築，情処研報，92-NL-90, pp. 1-8（1992）。